The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	方言のムードについてのおばえがき
Author(s)	工藤, 真由美
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2000, 34, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56528
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

方言のムードについてのおぼえがき

工藤真由美

1　はじめに

様々な表現手段で表される意味的カテゴリーとしてのモダリティーと、動詞の文法化されたパラディグマティックな対立として表されるムードとを区別した上で、世界の50の言語を調べた Bybee (1985) では次のようなことが指摘されている。

> Interrogative markers are uncontroversially markers of a speech act type. They occur bound to the verb in about one third of the languages that have mood markers. The distinction between indicative and interrogative occurs much less frequently as an inflectional distinction than the distinction between indicative and imperative. This simply means that there are more often noninflectinal ways of signalling interrogation, such as with particles that may occur on various elements in the sentence.

現代日本語の標準語も同様であって、動詞の形態論的カテゴリーとしてのムードとしては「スル（シタ）－シヨウ－シロ」のパラダイムが取り出される。「スル（シタ）」は〈叙述法（断定法）〉であり、テンスが分化し、人称制限はない。「シヨウ」は〈意志・勧誘法〉であり、テンスは分化せず、１人称あるいは１・２人称に限定される。「シロ」は〈命令法〉であ

り、テンスは分化せず、2人称に限定される。しかし、「質問」は上昇イントネーションや終助詞「カ」の付加という構文的表現手段によって表されるのである。

が、現代日本語の諸方言には〈質問法〉を形態論的表現手段で表す方言が複数見られる。早くには鈴木（1960）において首里方言のムード体系が記述され、そこでは〈断定法〉〈一般たずね法〉〈疑問詞たずね法〉〈うたがい法〉〈さそいかけ法〉〈命令法〉の系列が取り出されている。八丈方言も同様であって、「質問－応答」において次のような動詞のムード形式の使用が義務的であって、下線部の形式を相互に取り替えることはできないのである。

〈yes-no 質問の場合〉

「酒イ、飲ムー？」「オイ、飲モワ」

（「酒を飲むか？」「うん、飲む（よ）」）

「酒イ、飲ンダ？」「オイ、飲マラ」

（「酒を飲んだか？」「うん、飲んだ（よ）」）

〈疑問詞質問の場合〉

「アニョ、飲モ？」「酒イ、飲モワ」

（「何を飲む？」「酒を飲む（よ）」）

「アニョ、飲モー？」「酒イ、飲マラ」

（「何を飲んだ？」「酒を飲んだ（よ）」）

愛媛県宇和島方言にも〈叙述（断定）法)〉〈意志法〉〈勧誘法〉〈命令法〉に対して〈質問法〉が分化しているのだが、現在消滅の方向にあるのではないかと思われる。(a)のような〈叙述（断定）法)〉〈疑問詞質問法〉の非分析的な専用形式の使用とともに、標準語のように助詞「カナ」「ゼ（デ)」「ノ（ン）ゾ」を付加させることによって〈叙述（断定)〉〈yes-no 質問〉〈疑問詞質問〉すべてにスル（シタ）を使用する(b)のような表現形式が共

存している。

〈yes-no 質問の場合〉

(a)「酒、飲ム？」「ウン、飲マイ」

(b)「酒、飲ムカナ？」「ウン、飲ムゼ」

(a)「酒、飲ンダ？」「ウン、飲ンダイ」

(b)「酒、飲ンダカナ？」「ウン、飲ンダゼ」

〈疑問詞質問の場合〉

(a)「ナニ、飲マ？」「酒、飲マイ」

(b)「ナニ、飲ムン（ゾ）？」「酒ヲ、飲ムゼ」

(a)「ナニ、飲ンダラ？」「酒ヲ、飲ンダイ」

(b)「ナニ、飲ンダン（ゾ）？」「酒ヲ、飲ンダゼ」

共時的にも通時的にもいまだ十分な分析ができていないのではあるが、伝統的な方言の文法体系が大局的にみて急速に変化しつつある現在、不十分ながらおぼえがき的に記述しておくことにしたい。（世代差や男女差が大きいのであるが、ここでは70代の女性の場合について記述することにする。）

2　基本的なムード体系

宇和島方言の動詞のムード体系は大局的にみて次のようなパラダイムを形成していると思われる。音声的融合（縮小）を起こして非分析的な形式になっていることが特徴である。

動詞「食ベル」で代表させることにする[1)]。（普通体と違って、丁寧体のパラダイムは、中年層以下では、丁寧体の「食ベマス（食ベマセン）」「食ベマシタ」「食ベナハイ（食ベナハンナ）」以外はほとんど使用されない。）

［表１：普通体のパラダイム］

ムード＼テンス＼みとめ方			肯定	否定	
叙述法	断定法	非過去	食ベライ	食ベナイ	食ベラヘナイ
		過去	食ベタイ	食ベナンダイ	食ベラヘナンダイ
	推量法	非過去	食ベロー 食ベルロー	食ベマイ 食ベンロー	食ベラスマイ 食ベラヘンロー
		過去	食ベツロー	食ベナンヅロー	食ベラヘナンヅロー
質問法	yes-no質問法	非過去	食ベル	食ベン	－
		過去	食ベタ	食ベナンダ	－
	疑問詞質問法	非過去	食ベラ	－	－
		過去	食ベタラ	食ベナンダラ	（？食ベラヘナンダラ）
実行法	意志法		食ベロー	食ベマイ	
	勧誘法		食ベロヤ	食ベマイヤ	
	命令法		食ベ	食ベナ	

［表２：丁寧体のパラダイム］

ムード＼テンス＼みとめ方			肯定	否定	
叙述法	断定法	非過去	食ベマスライ	食ベマセナイ	食ベラシマセナイ
		過去	食ベマシタイ	食ベマセナンダイ	食ベラシマセナンダイ
	推量法	非過去	食ベマショー 食ベマスロー	食ベマスマイ 食ベマセンロー	食ベラシマスマイ
		過去	食ベマシツロー	食ベマセナンヅロー	食ベラシマセナンヅロー
質問法	yes-no質問法	非過去	食ベマス(カ)	食ベマセン(カ)	－
		過去	食ベマシタ(カ)	食ベマセナンダ(カ)	－
	疑問詞質問法	非過去	食ベマスラ	－	－
		過去	食ベマシタラ	食ベマセナンダラ	－
実行法	意志法		(食ベマショワイ)	－	
	勧誘法		食ベマショーヤ	食ベマスマイヤ	
	命令法		食ベナハイ	食ベナハンナ	

3　叙述（断定）法

スライ（シタイ）、セナイ（セナンダイ）／スラヘナイ（スラヘナンダイ）、シマスライ（シマシタイ）、シマセナイ（シマセンナンダイ）／スラシマセナイ（スラシマセナンダイ）は、話し手の断定を表す有標の専用形式である。従って〈終止〉の構文的位置でしか用いられない。（＊は非文法的であることを表す。「飲ンダケン（から）」「ソコニアル鋏」「雨ハ降リマスケンド（けれど）」のようなかたちにしなければならない。）

・「昨日酒飲ンダ？」「ガイニ飲ンダイ。ソンデ頭ズキズキスライ」
　「ソコニ鋏アル？」「ウン、アライ」
　「明日、雨ヤロカ」「コノブンジャ降リマスライ」

・＊昨日酒ヲガイニ飲ンダイケン、頭ガズキズキスライ。
　＊ソコニアライ鋏、取ッテヤ。
　＊明日雨ハ降リマスライケンド、アンマリハ降リマセナイ。

この形式に付加する終助詞は限定されている。

「付加できない終助詞」：ゼ、ゾ、テヤ、テテ、ガナ、ヨ

「付加できる終助詞」

　「普通体」：デ、ナシ

　「丁寧体」：ナー、ナシ

普通体に「デ」を付加した場合には〈話し手の断定の強調〉となる。相手の断定に対して反駁的に言う場合によく使用される。（過去形の場合は使用しにくい。）

・「明日ハ雨降ラナイ」「降ライデ」

また１人称の意志動詞の場合は〈話し手の実行の意志〉を表す。

・「誰ッチャコノ仕事センノナラ、私ガヤライ」

次に、終助詞「ナー」（「ナシ」）を付加し上昇イントネーションにする

と質問になるが、肯定であれ否定であれ話し手が断定したことに対して同意を求める〈確認質問〉である。

・「確カ、コノ本、前ニ読ンダイナー？」

「ウン、読ンダイ」／「ウウン、読マナンダイ」

「昔アノ山ニハ、蕨ガアリマシタイナー？」

「ハイ、アリマシタイ」／「イヤー、アリマセナンダイ」

・「確カ、コノ本ハ、読マナンダイナー？」

「ウン、読マナンダイ」／「ウウン、読ンダイ」

「アソコニハ蕨アリマセナンダイナー？」

「ハイ、アリマセナンダイ」／「イヤー、アリマシタイ」

疑問詞と共起した場合は、非過去形において〈反語〉になる。

・「誰ガ行カイ！」(＝誰も行かない)

「何処ニオライ！」(＝何処にもいない)

なお、叙述法は、以上のような〈断定法〉と、〈推量法〉とに下位分化している。推量法では次のように非分析的形式から分析的形式へと移行しつつある。そしてその結果、推量法と意志法とが形式的に区別されることになる。(「食ベルマイ／スルマイ」は中年層以下では〈推量〉の意味では使用されなくなっている。)

非分析的形式	➡	分析的形式
食ベロー／ショー		食ベルロー／スルロー
食ベツロー／シツロー		食ベタロー／シタロー
食ベマイ／スマイ		食ベルマイ／スルマイ
食ベナンヅロー／セナンヅロー		食ベナンダロー／セナンダロー

4　疑問詞質問法

スラ（シタラ）、セナンダラ、シマスラ（シマシタラ）、シマセナンダラ形式は疑問詞質問の有標の専用形式である。否定の非過去形には普通体でも丁寧体でもこの専用形式はない。また、第2否定形式の「スラヘン」は基本的に使用されない。(敬語「シナハル」「シサル」にはこの形式がある。)

・「ソコニ何ガ、アラ？」「鋏ヨ」
　「何処行キナハラ？」「病院デスライ」
　「ナセ（何故）来サラナンダラ？」「ガイナ風邪ヤッタンヨ」
　「雨降ッテキタケンド、ドガイ（どう）スラ？」「モウ帰ロヤ」

・「今日ハ魚屋ニ何ガアリマシタラ？」「鯛デスライ」

疑問詞が述語にくる場合には、普通体では終助詞「ゾ（ナ)」が付加される。(「ゾ」単独よりも「ゾナ」の方がやや丁寧である。）普通体の過去形「ヤッタ」および丁寧体の「デス（デシタ)」には疑問詞質問法がある。

・「ソコニアルノ、何ゾ（ナ）？」「鋏ヨ」
　「今度生マレタノ、ドッチゾ（ナ)」「女ノ子ゼ」
　「体ノ具合、ドガイゾ（ナ）？」「マダ熱ガアライ」

・「アソコニアッタノ、何ヤッタラ？」「鋏ヤッタイ」
　「体ノ具合、ドガイヤッタラ？」「マダ熱ガアッタイ」

・「ソコニアルノ、何デスラ？」「鋏デスライ」
　「サッキノ人、誰デシタラ？」「隣村ノ人デシタイ」

なお、この形式は終止専用であって、従属文化した場合には使用できない。この場合は終助詞「カ」「ヤラ」が使用される。

・「オ父サン、何処ニ行ッタカ、知ラン？」「畑ヨ」
　「ドッチガ勝ッタヤラ、分カラン」

5　yes-no 質問法

yes-no 質問には無標のスル（シタ）、セン（セナンダ）、シマス（シマシタ）、シマセン（シマセナンダ）形式が使用される。第2否定形式の「スラヘン」は、yes-no 質問にはならない。（後述参照）丁寧体では単独では使用されにくく、普通終助詞「カ」を伴うが、普通体では単独でも終助詞「カナ」を伴っても使用される。（普通体では「カ」単独よりも「カナ」の方がよく使用される。）叙述（断定）法の専用形式と疑問詞質問法の専用形式とのパラディグマティックな対立関係において、この形式は1次的には yes-no 質問法を表現するゼロ形式として機能していると思われる。従って、標準語のようなはっきりした上昇イントネーションは義務的ではない。

・「手紙、来タ（カナ）？」「ウン、来タイ」
　「手紙、来ナンダ（カナ）？」「ウン、来ナンダイ」
・「葱、アリマスカ？」「ハイ、アリマスライ」
　「葱、アリマセナンダカ？」「ハイ、アリマセナンダイ」

上昇イントネーションでは、次のように意志動詞の否定形において「勧誘」「軽い命令」の意味になる。

・「一緒に行カンカナ（↗）」（＝一緒に行こう」
・「モウ起キンカナ（↗）」（＝もう起きなさい）

ただし、無標形式であることから、次のように、普通体に終助詞「ヨ」「ゼ（デ）」「ゾ」「ガナ」「テヤ」「テテ」を伴う場合には、叙述（断定）法になる。このような終助詞は丁寧体には普通付加されない。（丁寧体に「ヨ」「ネ」を使用すると標準語的な言い方になる。）

・「電話ガアッタゾ」
　「誰ッチャ来ナンダガナ」

「今日ハ葱、ナイゼ（デ）」

なお、終助詞「ナー」を伴って上昇イントネーションにすると〈問い返し質問〉になる。疑問詞がある場合は、単純な問い返しである。既に1度言ったことを問い返されて再度答える場合には終助詞「テヤ」が使用される。これは2度目の発話であることを明示する終助詞である。疑問詞に直接付加する場合も「ナー」である。「ナン（何）ナー？」は相手の発話がすべて聞き取れなかった場合にも使用される。終助詞「テヤ」は、終助詞「ゼ（デ）」「ガナ」とは違って、命令形に付加することが可能である。

・「ソコニ何ガアルナー？」「鈦テヤ」

「誰ガ来タナー？」「隣ノ人ガ来タテヤ」

・「誰ナー？」「隣ノ人テヤ」

「何ナー？」「ハヨ行ケテヤ」

疑問詞がない場合には、相手の発話が聞き取れず単純に聞き返す場合もあるが、相手の発話が聞き取れていても相手の断定に疑問（不信の念）をもって問い返す場合も多い。

・「電話アッタ？」

「ナカッタイ」

「オカシヤ。ナカッタナー？」

「ナカッタテヤ」

また、「～ノ（ン）ヤナイ（カ）」形式が付加し上昇イントネーションをとると〈確認質問〉になる。

・「ヒョットシタラ雨降ルンヤナイ（カ）？」「ウン、降ライ」

「ヒョットシタラ雨降ランノヤナイ（カ）？」「ウン、降ラナイ」

叙述（断定）法に終助詞「ナー」が付加された〈確認質問〉と異なり、話し手の確信度は低い。従って、次のように「確カ」（「タイテイ」）と「ヒョットシタラ」との共起の仕方が異なる。

・「オ父サン確カ部屋ニオッタイナー？」「ウウン、オラナイ」

「オ父サンヒョットシタラ部屋ニオルンヤナイ（カ）？」

「ウウン、オラナイ」

・「今度ハタイテイ、勝タイナー？」「ウン、勝タイ」

「今度ハヒョットシタラ、勝ツンヤナイ（カ）？」「ウン、勝タイ」

第2否定形式の「スラヘン」は、以上の「肯定形式＋～ンヤナイ」に相当する〈確認質問〉になる。第1否定形式の「セン」は単純な yes-no 質問であるが、第2否定形式の場合は、話し手の肯定に傾いた判断に対する確認質問となる。従って、「ウン」と「ウウン」との対応関係が異なってくる。

・「オ父サン、部屋ニオラン？」「ウン、オラナイ（オランゼ）」

「オ父サン、部屋ニオラヘン？」「ウン、オライ（オルゼ）」

・「アノ人、私ノ悪口、ユ（言）ワナンダ？」

「ウン、ナンチャユ（言）ワナンダイ（ユワナンダゼ）」

「アノ人、私ノ悪口、ユ（言）ワヘナンダ？」

「ウン、ガイニユ（言）ータイ（ユータゼ）」

6　実行法

「ショー（スマイ）」は1人称の場合に〈話し手の実行の意志〉を表す。丁寧体の「シマショー」は終助詞「ワイ」が付くと〈意志〉を表す場合もあるが余り頻繁には使用されない。（「シマスマイ」は〈意志〉では使用されない。）また第2否定形式の「スラスマイ」は常に〈推量〉の意味であって〈意志〉は表さない。

・「今日ハテレビ見マイ。仕事ショー」

・「ソノ仕事ハ私ガヤリマショワイ」「スマンナー」

「ショーヤ（スマイヤ）」「シマショーヤ（シマスマイヤ）」は〈相手へ

の勧誘〉を表す。実行するのは1・2人称者である。助詞「ヤ」の有無によって、実行するのが1人称のみか1・2人称者であるかが区別される。

・「今日ハテレビ見マイヤ。仕事ショーヤ」

・「ソロソロ仕事始メマショヤ」

・「今日ハ雨ヤケン、仕事ヤリマスマイヤ」

「セー（スナ)」は相手（2人称）に実行を求める〈命令法〉である。丁寧体の命令は、敬語形式「シナハル」の命令形「シナハイ（シナハンナ)」が補充法的に使用される。命令形にも終助詞「ヤ」が付くが、意志・勧誘の場合と違って、実行の人称が変化することはない。

・「コノ酒、飲メ（ヤ）」

・「ソガイニ人ノ悪口、言イナハンナ（ヤ）」

7　動詞以外の場合

基本的にアスペクト・テンス・ムード体系は動詞述語において最も華やかなパラダイムをなすのだが、叙述（断定）法と質問法との分化は、形容詞述語、名詞述語にも認められる。ただし動詞述語ほど完全ではない。ここでは形容詞「寒い」を例として示しておく。

8　終わりに

以上方言では、相手に情報を与えるか求めるかによって異なる形態論的（非分析的）形式が存在することを記述してきた。質問法の場合に、疑問詞質問か否かによっても異なる形態論的形式が存在しているのだが、これは、疑問詞質問では述語が表す動作（属性）の成立・不成立が前提（旧情報）になっており、yes-no 質問では動作（属性）の成立の有無が〈焦点〉になっていることと関係があるのではないだろうか？

宇和島方言のムード体系には〈叙述（断定）法〉〈疑問詞質問法〉の専

［表３：普通体のパラダイム］

ムード＼テンス＼みとめ方			肯定	否定	
叙述法	断定	非過去	(サムイワイ)	(サムナイワイ)	サムアラヘナイ
		過去	サムカッタイ	サムナカッタイ	サムアラヘナンダイ
	推量	非過去	サムカロー サムイロー	サムアルマイ サムナイロー	サムアラスマイ サムアラヘンロー
		過去	サムカッツロー	サムナカッツロー	サムアラヘナンヅロー
質問法	yes-no 質問	非過去	サムイ	サムナイ	－
		過去	サムカッタ	サムナカッタ	－
	疑問詞質問	非過去	－	－	－
		過去	サムカッタラ	サムナカッタラ	－

［表４：丁寧体のパラダイム］

ムード＼テンス＼みとめ方			肯定	否定	
叙述法	断定	非過去	サムイデスライ	サムアリマセナイ	(サムアラシマセナイ)
		過去	サムカッタデスライ	サムアリマセナンダイ	(サムアラシマセナンダイ)
	推量	非過去	(サムイデショー)	サムアリマスマイ	(サムアラシマスマイ)
		過去	(サムカッタデショー)	サムアリマセナンヅロー	－
質問法	yes-no 質問	非過去	サムイデス(カ)	サムナイデス(カ)	－
		過去	サムカッタデス(カ)	サムアリマセナンダ(カ)	－
	疑問詞質問	非過去	－	－	－
		過去	サムカッタデスラ	サムアリマセナンダラ	－

用形式が存在し、それとの対立上無標形式が〈yes-no 質問法〉を第１次的には担っていると思われるのだが、このような（非分析的な）形態論的形式の発達は、ムード体系における〈叙述法－質問法－実行法〉の対立の中心的位置を示しているように思われる。

注

1)　以下のパラダイムは、本文で述べたこと以外にも、やや単純化したかたちで提示してある。第1と第2の点は形式上の問題である。

第1に、否定の過去形には「食ベナンダ」「食ベラヘナンダ」の他に「食ベンカッタ」「食ベラヘンカッタ」がある。ただし、丁寧体には「食ベマセンカッタ」という言い方はない。

第2に「食ベマイ（スマイ）」「食ベナ（スナ）」のような形式と同時に「食ベルマイ（スルマイ）」「食ベルナ（スルナ）」のような分析的形式も使用される。

第3に「食ベラヤ」「食ベナヤ」という感情評価性を伴った断定法も存在する。これは「サム（寒）ヤ」「静カヤ」のように形容詞、形容動詞述語にも存在する。

第4に叙述法にはさらに「食ベルカイ（スルカイ）」のような〈反語〉専用の形式も存在する。形式上は肯定であるが意味は否定である。

主要参考文献

奥田靖雄1996「文のこと・その分類をめぐって」『教育国語』2・22
金田章宏1986「たずねとうたがい－山形県南陽方言－」『国文学解釈と鑑賞』1月号　至文堂
工藤真由美2000「八丈方言のアスペクト・テンス・ムード」『阪大日本語研究』12
渋谷勝己2000「方言地理学と文法」『阪大日本語研究』12
鈴木重幸1960「首里方言の動詞のいいきりの形」『国語学』41
鈴木重幸1972『日本語文法・形態論』むぎ書房
仁田義雄1991『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
南不二男1985「質問文の構造」『朝倉日本語講座4』朝倉書店
宮崎和人2000「ムードとモダリティー」『日本語学』19　明治書院
Bybee, J. L. 1985. *Morphology.* John Benjamins.
Chung, S. and A. Timberlake. 1985. "Tense, aspect and mood." in Shopen, T. (ed.) *Language Typology and Syntactic Description.* John Benjamins.
Palmer, F. 1986. *Mood and Modality.* Cambridge UP.
Sadock, J. M. and A. M. Zwicky. 1985. "Speech act distinctions in syntax" in Shopen, T. (ed.) *Language Typology and Syntactic Description.* John Benjamins.

付記

本稿は2000年度文部省科学研究費「方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究」基盤研究（B）によるものである。

（文学研究科教授）